

女性運転者の教習場面の特性に関する調査研究（昭和 58 年度）

女性運転者の運転実態、運転態度、安全意識など、車とのかかわり合いを検討・分析した昭和 57 年度調査研究の結果を踏まえて、昭和 58 年度には運転の教習場面での女性の諸特性を明らかにするため、教習原簿の調査、学科試験の誤答率の調査、アンケート調査を行った。

- ① 昭和 57 年 9 月からの 1 年間に指定教習所を卒業した男女 2,349 人の教習原簿に記載されている内容を抽出して分析した。技能教習に要した時限数は、女性が平均して 8 時間程度男性より多くなっている。若年齢層では顕著な男女差を示すが、40 歳代以降は大きな差が見られない（図）。男女差が大きいのは、第 1、第 2 段階で、第 4 段階（路上）になると差は縮小している。各教習項目の練習頻度をみると、第 1 段階の発進停止、ハンドル操作、変速操作で女性が男性にくらべ 1 回程度余計にかかっている（図）。卒業検定については、男性の 79%、女性の 69%が延長教習を必要としないが、女性では年齢の高いほど延長時間は増す傾向を示している。教習指導員の評価を見ると、第 1 段階では「発進停止」「変速操作」「ハンドル操作」についてのチェック率が高く、女性では高齢者で顕著である。第 3 段階では「右・左折」「進路変更」「方向転換」において女性でチェック率が高い。
- ② 適性検査で分類される類型別と教習の進度との関係を見ると、資質的に低いとされる G 型が男性の若年齢層、女性の 30 歳以下で 5 時限前後時間がかかっている。延長教習にあっても男性の 19 歳以下、女性では各年齢層とも G 型の割合が高い。みきわめ不合格率では、第 1 段階の「発進停止」「変速」「ハンドル操作」、第 2 段階の「速度」「変速」「バック」、第 3 段階の「進路変更」「方向転換」、第 4 段階の「ハンドル操作」という走行上の主要動作において、女性の G 型のチェック率が高い。
- ③ 学科試験については、昭和 58 年 9～10 月に入所中の教習生男女 2,116 人を対象に、模擬試験を実施した。女性に特有の誤答率の高い問題は「エンジンプレーキの使い方」「駐車場からの出入り」である。
- ④ 免許取得直前の男女 2,910 人へのアンケート結果をみると、学科では、男性が加齢と共に難しいとする割合が増す傾向を示すのに対し、女性では年齢とは関係しない。不安を抱く項目は男女とも「狭路でのすれ違い」「自転車との併進」「歩行者の側方通過」をあげているが、女性では「バックでの駐車」「タイヤ交換」も不安感が高い。
- ⑤ 以上のような男女の差を、教習場面に配慮して学習効率の良い教習プログラムを計画することが必要と思われる。

図 第 1 段階練習頻度 ②

